
青春とは、恋することと見つけたら。

まほつか屋敷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春とは、恋することと見つけたり。

【Nコード】

N8973Y

【作者名】

まほつか屋敷

【あらすじ】

青春とは無縁のまま受験生へ……。このままでいいのか！否！今こそ行動の時である！高校三年生の空回りラブコメ。全2話完結済み。

前編

高校三年、四月。

私は気づいた。

青春は、歩いてこないものである。

愚か者であるところの私は、およそ青年期というものに至れば多少の時期と事象の差はあれ、誰しも青春的催しに心躍らせ一喜一憂し、遠い未来に過去を振り返った時にはその輝かしい思い出に目を細めざるをえなくなるものだと思い込んでいた。

現状を振り返る。そして、私は絶望する。

果たしてこれほどまでに華のない高校生活を送っている学生が現代日本に何人いるだろうか。何の委員会にも所属せず、部活に明け暮れるでも、またバイトをするでもなく、狭い交友関係に異性の香りは微塵もない。ボランティアどころか学校行事に対してでさえ、私は一貫して無関心であった。特に理由があつたかと問われるとこれといったものはなく、ただ徒然なるままに日を暮らしていただけである。私が高校生活で打ち立てた唯一の事業といえば、図書室の年間貸し出し冊数校内一位ということぐらいであろうか。本と、目の前にいる藤村だけが、私の数少ない親友である。どうか神よ、こんな男なんかより、美少女を私に与えておくれ。

「ひがんでるなあ」

「うるさい、俺の知らぬ間に彼女など作りおつてからに」

私はメロスのごとく憤怒した。彼女持たず女友達作らずのろけ話持ち込ませずの非モテ三原則を打ち立てた頃の藤村はどこへ行ったのだろうか。二人でこの暗くむさ苦しい洞窟で籠城しようと思ったのではないか。眉根を寄せ、私は藤村を睨む。

いや、違う。私は藤村を恨むことはできない。私達はただ青春の仕方というものがわかっていないに過ぎなかったのだ。藤村はどういう経緯があつたのかその方法を知り、私は未だそれを知るに及ん

でいないというだけなのである。そもそも冷静になつてみると、非モテ三原則など掲げた覚えがなかった。

「まあいい。藤村、お前の俺に対する狼藉は許してやる。許してやるから、俺に女子を紹介しろ」

「えらく上から目線でものを言うな」

「この私めに女の子をご紹介くださいませ」

「お前にプライドはないのか！」

自分から文句をつけておいて、こいつは何を言っているのだ。

「つーか、俺に紹介できる女の子なんているわけないだろ？」

急に尤もなことを言う。確かに、つい先月までは私と同じく青春とは縁なき道を蒸気機関車よろしく突っ走っていた藤村である。私に紹介する女がいるほど、藤村の交友関係は広くない。こいつに恋人ができたのは、真に奇跡なのである。

それにしても、私は惨めである。何が楽しくて男二人の放課後の教室でひがんでいるのだろうか。むなし。この空虚な心持を和歌にする才能があれば、同じような境遇の男子を虜にすることもできるだろう。それはもう、間違いなく。ただ問題は、男に好かれても何のメリットもないということである。

「けど、そーいや梨奈が彼氏募集中の女友達がいるようなことを言っていたよーな」

私の目に希望の星が輝く。ちなみに梨奈というのは、この藤村の彼女である。一度会ったことがあるが、藤村にはもったいない清楚な乙女であった。一体この男のどこに恋人となる価値を見出したのか、私は甚だ疑問でならない。くそ、私では駄目なのか。と、今はそんなことを思っている場合ではない。

「もしお前の話が真実であるならば、お前は梨奈さんに俺のメアドを伝えるように申し上げる義務がある。早急に、かつ迅速に、だ」

藤村は苦笑し、必死だなぁと呟いたが、あいにく私に死ぬ気はない。生きて、青春という薔薇を手中に収めねばならぬ。たとえその棘によって我が身が傷つくことになろうとも。

「ま、伝えるくらいはしてやるよ。そんじゃ、俺は帰るぜ」

藤村は鞆をひよいと担ぎ上げると、私を置いて教室を出て行った。教室には、そして誰もいなくなった。

名前も知らぬ古代ギリシアの恋の神よ。私はあなたに感謝せねばなるまい。

とある日曜日の午後。駅前の噴水で、私は心中そつと涙を零す。無論、悲しみのためではない。

いい加減な藤村のことだから、私はあまり彼氏募集中なる女子との会合を期待してはいなかった。嘘である。実際ものすごく期待していたが、やっぱり駄目だったなどと言われてはこの身がバベルの塔と同じ末路をたどってしまうので、期待しないように努めていたのである。

しかし意外や意外、話はほとんどん拍子に進み、梨奈嬢を通じてメアド交換、幾度かのメールの後に今回のデートが決定した。日本では、十七条の憲法然り御成敗式目然り十七という数字に力があるとされている。陰だか陽だかが理由であるはずだが今ひとつ覚えていないのは私が世界史選択者だからであろう。私は私の歳が十七であることに感謝した。同時に日本に生まれたことを感謝した。例えばイタリアなら、十七は忌み数である。ここまであっさりとデートにたどりつくことはできなかった。十七、日本、素晴らしい。

さて、話を戻すと、目の前の彼女　かぐや嬢は、なるほど金色の竹から生まれでもしない限り、ここまで整った顔だちにはならないただろうというほど、この上なく可愛らしい黒髪の乙女であった。背後の噴水に飛び込めば、誰もが泉の妖精と見まごうことだろう。精巧に作られた日本人形からあの独特の不気味さをスポイトで取り除けば、彼女の美しさの片鱗を表現できるかもしれない。私がラファエロを抱えていれば、たとえこのかぐや嬢と接点がなくとも千万枚の絵を描かせていたに違いない。尾崎紅葉なら、一体彼女をどのように描写しただろうか。私には到底想像できない。

つまりだ。

超絶美少女だったのだ、かぐや嬢は。陳腐な表現で申し訳ない。

「あ、あの」

対面以来呆けてしまっていた私にかぐや嬢が声をかける。凜とした、しかしそれでいて温かみのあるその音色に私ははっとして意識を取り戻した。直接の自己紹介もまだであつた。私はまず名乗り、それから、

「かぐや……ちゃんできれいだったろうか」

「はい」

かぐや嬢は微笑んだ。ああ、天使がいる。私は大いなる天から祝福を授かっている。神はきっと、我が善行をしっかりと見ていたのである。私は彼女を幸福に導いてみせよう。そしてともに過ごしていこう。そう誓える。ああ、神よ。

いかにいかに。またしても意識が旅行に出かけてしまうところだった。

「とりあえず歩こうか」

噴水の前で彼女がいかに映えるかについてはもはや説明は不要と思われるが、なればこその他の場所でのかぐや嬢の姿も見てみたいと思うのが自然の理であろう。かぐや嬢の了承を得、私達は雑踏の中へと歩き出していった。

できるだけ冷静に、取り乱したりすることのない大人びた人間を演じようと私は努めるが、生来上がり症である私はかぐや嬢に対して「今日はいいい天気だね」と言い「快晴ですね」と同意を得られた辺りから要領を得ない会話を続けていた。時に、大通りの中で私の指がかぐや嬢の指と、一瞬ではあるが触れ合った時など昇天しないように必死だった。胸が大きく跳ね、呼吸も忘れる。いくらかそのまま歩き私がむせた時に「大丈夫？」と上目遣いで語りかけてくれるのを見るに、彼女は私との接触到に気づいていないようだ。それがまたいじらしい。手を繋ぎたいと思った。そしてそのまま抱きしめたいとも。惜しむべきは私が草食系男子だったことである。毎度フ

アミレスで野菜バーに張り込んでいたしっぺ返しをこんなところで喰らおうとは。

私達は商店街から通じる地下にある飲食店に入った。白を基調とした清潔感ある店である。事前にその客の少なさは確認済みであった。客はひとり。ベストは客なしであったが、まあいいだろう。

「どれでも好きなものを頼んでくれ。俺がおごろう」

「えっ、そんな悪いよ」

「いいからいいから」

謙虚なかぐや嬢はしばらく逡巡したが、私が引かない姿勢を見せると、紅茶を一杯頼んだ。他にも頼んでいいと意見するとチョコレートケーキをワンカット注文した。私は私で適当に頼み、しばし待つ。

「ところで、かぐやちゃんの学校生活はいかほどのものかな？」

「毎日が楽しい。でも、気づいたら受験生になってて、もうびっくりしちゃった」

主に後半部分に、私は大きく頷いた。光陰矢のごとしとは高校生のためにあるような言葉である。

注文した諸々がそろってから、割と学校の話は続いた。なにぶんお互い何も知らぬ身であるが、等しく進学校生である。教師あるあるだとか、宿題あるあるなどで大いに盛り上がった。その中で知ったが、どうやらかぐや嬢は古文が苦手らしい。

「単語が覚えられないよー」

「ふむ」私は一考して「らうたし」と言った。

「なに？」

「いや、古文の意味当てゲームと行こうではないか」

「らうたし？」

「らうたし」

かぐや嬢は幾度か反芻する。真剣に悩んでいる表情がまた可愛らしい。らうたしである。私がそんな彼女をにやにやと見つめていると、どうにも参ったのかかぐや嬢は白旗を上げた。「ならばヒント

を上げよう」と私が言うと、こくりこくりとかぐや嬢は頷いた。いちいち愛らしいやつめ。

「かぐやちゃん、らうたし」

「え？」

「かぐやちゃん、いとらうたし」

私は連呼した。初め、かぐや嬢はぼかんとしていたが、私が連呼し続けると、やっと悟ったのか、見る見る間に頬を赤らめていく。りんごというよりは、さくらんぼ。

「もしかして、『かわいい』？」

「正解だ。かぐやちゃん、いとらうたし」

答えが出てからも、彼女の表情があまりにも可愛らしいせいで、私は何度もそのフレーズを繰り返した。あまり広くない店内の私達を除く唯一の客がちらりとこちらを見た。ひとりチャーハンを頬張るその男の視線に気づき、私は急に恥ずかしくなった。女の子にかわいいなどと言ったのは、生まれてこの方初めてのことだった。どこかのぼせていたということは否めない。

皿を空け、少ししてから私達は店を出ることにした。会計は私持ちである。「会計二九六〇円になります」私は硬直した。二人合わせてもせいぜいファミレス一食分程度しか食べていないではないか。伝票を見ると、きちんと内訳が記されている。しかし、紅茶一杯八〇〇円はいくらなんでもぼったくりであろう。おごとと決めた時点で、かぐや嬢に金銭面の心配がないから、値段まで調べるのを忘れていた。何かを察したのか、かぐや嬢が言う。

「あ、やっぱり私も払ったほうが」

「それには及ばない」

私はこの程度の出費痛くも痒くもないわと言わんばかりに胸を反らし、代金を支払った。財布の大打撃とともに、この店がなぜあれほどまで客入りが悪いのかを知った。

その後、私達はゲームセンターに行った。プリクラを提案される

が恥ずかしさゆえに断ってしまつた。かぐや嬢はレースゲームが好きらしく、よく兄とプレイしたそうだ。私はやや不慣れであつたが、彼女の隣の座席を陣取り、百円玉を投入した。

ランダムで車体を選択した結果、スマートな赤いフォルムが情熱的で美しいかぐや嬢に対し、私のはくすんだ黄色の、ともすればワゴンと見間違つてしまいそうな、みすばらしいものになつてしまつた。ゲームが始まつてからもすすいと進むかぐや嬢と比べ、私は幾度となく壁にぶつかり、エキストラの車にぶつかり、時に空中を二、三回転した。どこぞの坊ちゃんでもこんな無鉄砲な走法はしないだらう。しかし、そんな雑な運転を行っているにもかかわらず、私の車は決して大破することはなかった。ゲームの使用上当然であるが、どんな目にあつても走り続けるその姿に私は感動さえ覚えた。危うく一周差をつけられそうなところで私はゴールした。少し誇らしげに胸を反らしたかぐや嬢は、やはりこの上なく美しい。この笑顔を見るためになら、私は何度だって百円玉を投入できるだらう。本屋でぶらぶらした後、駅で解散してから、私はこの日を胸に刻みつけた。

翌日の月曜日、私は学校で頭を抱えていた。

なぜ昨日、私はプリクラを撮らなかつたのだ。悩みの種はそこである。

いちいち確認するまでもなく、昨日は私にとって人生初のデートだつたのだ。ならば、何か形に残る思い出の品を作るべきだつただらう。私は馬鹿である。ぼつたくりレシートのみが、確かなあの日を象徴するものとなつてしまつた。

手も繋いでしまつたほうがよかった。ある程度積極性があつたほうが男らしいだらう。いや、しかしあまりがつがつしすぎて軽い男と思われてはたまらない。私がかぐや嬢と築きたいのは、そんな不埒な関係ではない。きっと、彼女の望むところでもないだらう。

藤村が何度か話しかけてきたが、あいにく私は答える氣力を有し

ていなかった。

いつまでもくよくよ悩んでいても仕方がない。私はかぐや嬢と都合のあう日を探し、前のデートから二週間後の休日に出会う約束を交わした。

当日までに待ち焦がれて我が身が灰と化してしまふのではないかと危惧していたが、何とか持ちこたえ、その日を迎えた。

「やあ。おはよう、かぐやちゃん」

「うん、元気してた？」

私はそれにつこりと紳士的な笑みを返す。今日も一段とかぐや嬢は麗しい。現代日本の若者のようなカジュアルな服装に身を包んでいながら、古来よりの「和」を節々から匂わせる。そう、かぐや嬢の愛らしさは、時代を超えるのだ。

私達は駅前でしゃべり始めた。落ち着ける公園があるでもないし、前回のように客入りが少ない飲食店も思い当たらない。二度連続で同じところに行くのは気が引ける分、アイディアらしいアイディアがないのだった。カラオケという線もあったが、付き合ってもない男女が個室で二人つきりというのはあまり好ましくないだろう、かぐや嬢にとって。

それに、これは前回確信したことであるが、かぐや嬢の姿が見えるだけで、その声が鼓膜を震わせるだけで、私の心は満たされるのであった。彼女がいれば、私はどこでも天国にいる心地なのだ。

かぐや嬢ととりとめもない貴重な会話をしていると、かぐや嬢の名前がふと呼ばれた。彼女の視線にあわせて私は顔をぐるりと反転。たつたと走り寄ってきたその子は、どうやらかぐや嬢の友達らしい。「偶然だねっ」

かぐや嬢と両手を合わせながら、三つ編みの彼女は言う。それからやっと、私の存在に気づいた。目をぱちくりと瞬かせる。なんとなく私は縮こまってしまった。

「あれ、もしかしてこの人、かぐやの……？」

などと口を開くものだから、私は困ってうつむいてしまう。かぐや嬢に目を向けると、彼女も同じ心境らしかった。どう答えたものかと悩んでいたが、かぐや嬢は照れを押し隠した声で言った。

「今は、まだ、違う」

「まだ」という言葉に、私の心臓は天にまで跳ね上がった。それは、つまり、いずれ付き合ふことが確定的になると思ってくれているからの発言ではないだろうか。小躍りしたくなったが、かぐや嬢のご友人もいるのでとどまった。

ああ、愛しきかなかぐや嬢。もし私が帝なら、天からの使者がきみを連れ去ろうとしても、必ずや引き止めてみせる。

しかし私を感じ入っている間に、なんとかぐや嬢は友人と談笑を開始してしまった。中学の時いた誰それが何がしと云々……、私に入り込む隙間はない。駅前に咲いた会話の花は、遠目に見ても美しいが、それは触れられる位置にあつてこそ。一瞬にして孤独となつてしまった私はひそかにかぐや嬢の友人を恨んだ。早く帰れ。

その思いが通じたのか、はたまた彼女自身に用事があつたのか、かぐや嬢の友達はまだ長居はせず、人ごみにまぎれていった。その後、私達は夕陽が駅前を赤で覆うまで雑談に興じた。それだけしかしなかったのかと誰かが見ていれば感じるかもしれないが、有意義なひと時であると思は思う。

「そうだ。前回もそうするべきだったかもしれないが、今日はかぐやちゃんを家まで送ろうと思う」

「えっ、いいいいいよ。電車も違うし」

私はちよつと、むつとしたように言った。

「男が送ると言うのは、往々にして少しでも長く一緒に居たいがためなのだぞ？」

言ってみて、照れくさくなつて私は顔を横に背けた。私らしくない発言であつた。しかし本音であるので、訂正はしない。見ると、かぐや嬢は頬を赤らめてうつむいてしまっている。だが、何度か金魚のように口をパクパクさせた後、囁くような声で言った。

「今は、まだ、だめ」

結局彼女の言に従い、私が帰路に着いたことは言うまでもない。
かぐや嬢は「まだ」の魔術師である。

後編

そのデートから数日後、ある異変が起きた。

かぐや嬢のメールの返信頻度が、突如急激に下がったのである。

なぜだ。一体何が起きたというのだ。二週間ほど経ってから、私は突然あせり始めた。

私は過去の行動を顧みる。何か不快な発言をしただろうか。もしくは、呆れられたとか。私はそこまで顔がいいほうでもないし、かぐや嬢のような美少女と確かに不釣り合いではあると常々思っていたが、彼女がそんなことで人を判断するとは思えない。……いや、これはただの私の願望だ。かぐや嬢だって、かつこいい男のほうがいかに決まっている。だが、しかし、ううむ。他の方面からも考えてみよう。例えば、私が会いたい会いたいとしつこかったのがいけなかったのかもしれない。デート中、いやらしい目を向けていなかっただろうか。他に好きな人ができた、などというのは最悪のパターンである。

返信が来ていないのに、新たにメールを打つのは気が引ける行動である。しかし三日も四日も返ってこないのではこちらから動かざるを得ない。ところがそのメールにも反応がないとなれば、もう目も当てられない。たまに返ってきて私は即座に飛びつくのだが、長くは続かずすぐに途切れてしまう。

一ヶ月以上そんな日々が続き、私はかなり滅入っていた。私は、一体どうすればよいのだ。

「ちゃんとその理由を聞いてみるしかないだろ」

藤村の意見に肩を借りるのは甚だ癪に触ることだが、他に切れるカードも持ち合わせていない。帰宅してから、私はここ最近のつれなさについて、できる限り棘なく、軽い調子で尋ねる文面をメールとしてしたためた。送信ボタンを押す。押してから不安、焦り、後悔、その他諸々の負の感情が私の血管を駆けずり回った。ベッドに

身体を投げ出してから、気だるさに抱かれるも、不思議と眠気は全くやってこなかった。

返事が来たのは、その二時間後だった。私は跳ね上がった。

『ごめんなさい！ 部活最後の大会がもうすぐあって、疲れちゃってなかなか返信できなかったの！』

それで、えっと、

会うのはたぶん、無理です。

お互い受験生だし、そんな余裕ないと思うの。ごめんね？』

突如、目の前が真っ暗になる感覚に襲われた。同時に、首根っこを引っ張られ、ベッドに倒れる。違う。全身から力が抜けたのだ。そのことに気づくまでに、時計の秒針は二周もしていた。

「は、はは。終わった」

受験が終わるまで、あとおよそ十ヶ月。もし彼女が私にささやかなりとも好意を寄せてくれていたならば、こんな提案はされないはずだ。全く、これっぽっちも、私は何も想われていない。あの二回のデートは、単に天使の気まぐれだったのだ。

私にできることはなかったのか。もつと積極的に私の気持ちを押し出していけば、かぐや嬢もその気になってくれたのではないだろうか。今からできることはないのか。取り戻せないのか。私の青春は、こんなちやちなメールの着信音で終わりを告げられてしまったのか。駄目だ。何をしてもうまくいかない気がする。いや、確信じたものがある。私は何をやっても上手くいかない星の下に生まれてきたのだ。他人が今の私を見れば、そんな感情はまやかし、ただの幻想、愚かな被害妄想と受け取るかもしれない。くそ、馬鹿なやつらめ。せいぜい私を嘲るがよい。誰も私を理解してなどくれないのだ。世界で一番孤独なる者、それが私である。もう諦める。恋だけではない。青春そのものでもない。人生を、放棄してしまうのがよからう。この暗い深淵から脱出する方法は、それ以外にない。

ああ、ウェルテルよ。状況はかなり異なるとも、今の私ほどお前を理解してやる者はいない。ゲーテよりも、今の私はお前に近いの

だ。選択権というものは、我々は持ち合わせていない。女性に振り回される憐れなピエロ。そうだ、いつかお前が語った自殺の善し悪しを、当時の私は鼻で笑ったものだった。しかしウエルテル、私は愚者であつたのだ。お前の論は、ピタゴラスの定理よりもなお美しく歴としたものであつたよ。

これだけ深い谷底へ突き落とされながらも、私が頭を弾丸で撃ち抜かなかったのは、手元にピストルがなかったからではなく、ひとえに友人、藤村からの電話が来たからに他ならなかった。

「どうだつた？」

私は軽く携帯電話を握りつぶしたくなつた。しかし、それはただの八つ当たりである。私はありのままの状況と、私の心境を語つた。藤村は基本的に相槌を打つのみであつたが、それが私にとってどれほどありがたいものだったことか！ ウエルテルにとってウエルヘルムが、いかに大切な人物であるか。彼がいなければ、ウエルテルはもっと早くに壊れてしまつていたに違いない。

いくらか話して楽になつたことを伝えたと、じゃあ今日は早めに寝ろと返ってきた。藤村にしては悪くない提案である。私はその言葉に従い、制服のまま、まどろみの中へ沈み込んだ。

「カラオケにでも行こうぜ。おごつてやるよ」

放課後肩を叩かれ、振り向いた私への藤村が寄越した開口第一声である。

私は度肝を抜かれた。藤村の口から「おごる」などという動詞が飛び出したことは、過去の長い付き合いでも、一度としてなかった。私を氣遣つてくれるのはわかるが、どうしてここまで積極的なのだろうか。さすがに不審に思い、私は尋ねた。

「いや、お前に今回の提案したの俺じゃん。やっぱ罪悪感っていうかさ。こうなるんなら紹介しなかったほうがよかったのかなー、なんてさ」

危つく私は藤村に惚れかけた。いつから藤村はこんな責任感のあ

る男になったのか。彼女か。やはり恋人ができたからか。女は男を変えるというが、それがよい方に働くとは珍しい。それだけ藤村の彼女である梨奈嬢が優れた人物だという証明であろう。藤村、絶対幸せにしてやれよ。梨奈さん、不束者ですが、こいつのことどうかよろしく願います。

結局私は藤村の言に甘えることにした。帰宅せずそのままカラオケボックスに入り、私は叫ぶように歌った。何をかといえば、アニソンである。二千年代初頭の懐かしいアニメソングを、私は大熱唱した。あまりに熱くなりすぎたので、防音の壁が溶けてしまったかもしれない。少なくとも私の凍てついた心は、だんだんと熱を取り戻していった。私は藤村に感謝の言葉を述べようと思った。しかし、何も思いつかない。淡々と読書のみを積み重ねてきたというのに、どうして私はこうも語彙力に欠けているのだらう。間奏中に藤村をちらりと見やる。藤村は笑った。私も笑みを返した。たぶん、私たちにはこれで十分なのだろう。

夕暮れ時に、私達はカラオケボックスを後にした。気分が軽くなったおかげで、私は今日がとある人気小説の文庫落ちの日であることを思い出した。なかなか縁がない作家であったが、この機会に手を伸ばしてみようと思い、私は藤村とともに駅前の書店へと赴いた。目当ての本はすぐに見つかり、私は早速購入した。

「今日は付き合ってくれてありがとう。おかげでいろいろすっきりしたよ。さあ、帰ろうではないか」

「お、おう。そうだな」

「どうした？」

「いや、なんでもない」

額に嫌な汗を浮かべながら、藤村はなぜかぎこちない笑みを形作った。そして私が本屋の出口へ向かおうとすると、「ちよつとぐるっと回っていいこうぜ」などと言う。一体どうしたのだ？ 私は訝しく感じ、その背後をなんとかして見ようと努力する。

「お、あんなところに梨奈さんが」

「え？ マジ？ どこどこ！」

もちろん虚言である。数少ない親友を騙すことに若干の心の痛みを私は覚えるかと思っただがそうでもなかった。所詮藤村との間柄などその程度である。

しかし、とにかくにも私は愚か者だった。

藤村の気遣いも蔑ろにし、ああ、その上このような場面を目の当たりにしてしまうとは。ピエロでもこんな愚行はするまい。なぜかくも、かくも厳しい現実を、神は我が眼に焼き付けるのか。

私の視界の奥には、幸せそうに寄り添い歩く、かぐや嬢と、見知らぬ長身の男。

藤原に手を引かれるままに、私は書店を抜けた。

家に帰ってから、私は激怒していた。メロスの比ではない。私の怒りが具現化すれば、アトランティス大陸は海に沈み、シヨゴスすら蒸発させ、恐怖の大魔王をも屈服させるだろう。

ふざけおってからに、ふざけおってからに！ 私は枕を壁にぶん投げた。『受験生だし』などと言っておきながら、自分はイケメンとデートとは！ 驚き呆れて開いた口が塞がらぬわ！ ちよつとばかり可愛いからって調子に乗りおって！ 何をやっても許されるなだと思っっているのかあの小娘は！？ 所詮男は顔か！？ ええ！？ 身長ですか！？ どうなのだ！

はつきりと答えるがよい！

「間違ってる、こんな世の中。狂っているのだ、この世界は」

私はぶつぶつとばやきながら、携帯電話の数字キーを連弾した。

豪雨よりも絶え間なく文字をつづる。脅迫にも近い、呼び出しのメールである。

鬼気迫る文面にかぐや嬢は即座に返信を寄越した。会えない、という主旨のメールである。私はしつこく食い下がった。もう好意などはないのである。ただ、私は怒りをぶつきたいだけなのである。この私の純粹かつ誠実かつ真摯かつ慈愛に満ち満ちた心を裏切

りおって！　すぐにとつちめて高瀬舟に乘せてやる！
ついにかぐや嬢を籠絡し、次の土曜日の午後に待ち合わせるこ
となつた。

土曜日になつても、この私の怒りは収まるはずもない。待ち合わ
せ場所へ電車で向かう途中、今にも爆発しそうな怒りのエネルギー
を私は吊り革を引きちぎることで発散しようとしたが、思いのほか
吊り革は丈夫だったのですぐに諦めた。

待ち合わせ場所に、すでにかぐや嬢は着いていた。彼女は少しむ
つとした表情で口を開いた。

「あんまり会わないようにって言ったよね？　お互い受験生だし、
今が一番大切な時期でしょ？」

とがった唇は艶がよく、しかし私からしてみればファム・ファタ
ールに他ならない。彼女が猫の皮を何千と被った妖怪であることを、
私はとくに見抜いているのだ。私は彼女の言及に謝罪することな
く、ひたすらに先日のことを糾弾した。

「受験で忙しいなど言っておきながら、自分はイケメンとデート
とは。俺もなめられたものだな」

「え？」

「俺は見たのだ。先週、きみが駅前の書店を男と一緒に歩いている
ところを。よりにもよって、俺に『もう会えない』だなどとメール
を送った次の日に！」

私の純情を蟻のように踏み潰しおつてからに！　私は溜め込んだ
激情をかぐや嬢にひたすらぶつける。呆氣にとられているその顔面
に、私の言葉の右ストレートをひたすら見舞つてやる。私の布団が
濡れたのは、寝汗のためばかりではない！　虎となり、私は叫んだ。
もはや自分でも何を言つたか覚えていない。何かを言つたのかも
定かではない。感情の奔流に身を任せた鋭い枝となり、私は滝つぼ
へと突き進んだ。

「あんまりでは、あるまいか」

最後の最後に私の口から出た言葉は、自分にしても情けないものであった。大きく肩を揺らし、肺の中に酸素を取り込む。

「あの」

かぐや嬢は上目遣いを私にする。なんだ。何か言いたいことがあるのか。この期に及んで言い訳でもするのか。いいだろう！ それを聞いた上で、さらに完膚なきまでに貴様の腐った精神を蹂躪し尽くしてくれるわ！

「それ、お兄ちゃん、私の」

ついに自らの罪状を認めたかこの小娘が！ お兄ちゃんとなら一緒にデートしても私が許すとしても……ん？

「……はい？」

「去年東大に合格したお兄ちゃんが用事で帰ってきたから、参考書を選んでもらってたの」

私のあごは外れた。慌てて元に戻す。

「マジ？」

「うん、マジ」

かぐや嬢は相好を崩した。まるで先ほどの罵詈雑言が聞こえていなかったかのように笑う。もちろん彼女の耳に届いていなかったはずもない。

「こんなに嫉妬されるなんて、なんだか照れるなあ、えへへ」

ただ、私が積み上げた言葉達を、私とは違う角度から見ただけだった。

落ち着け。落ち着け私よ。言い聞かせるも、嫌な汗は吹き出るし、目の焦点も合わない。ジェットコースターに乗っている気分だ。

「でも、あんな力強いメール送られちゃったから、ちょっと怖かったんだよ？ 大学まで、まだちょっと遠いけど、一緒に合格しようって言ったのに」

「え、ええと、これはその、なんと申し上げればよいのやら」

動揺する私の首に、かぐや嬢の両腕が回される。私は驚き咄嗟に目を閉じた。ぐいっと引つ張られる感覚の後、私の額に何か柔らか

く湿っぽいものが押し当てられた。そう、例えて言うならば、唇、の感触。目は以前閉じたままなので、実際のところは不明である。

永遠にも似た刹那が通り過ぎた後、かぐや嬢は私から離れた。私が目を開けると、彼女は頬を目一杯染め上げながらも、甘い甘い蕩けそうな笑顔をその小ぶりで愛らしい顔に咲かせる。私は言った。

「わ、ワンモア」

「だーめ。次は大学合格してからね」

こうして私の青春的高校生活は終わりを告げ、受験戦争の嵐の中へ身をやつすこととなった。しかしいたし方あるまい。

全ては彼女と一緒に、薔薇色のキャンパスライフを満喫するためなのだから。

「かぐや嬢、いとらうたし」

後編（後書き）

楽しんでいただけたならば幸いです。それがなによりの活力になります。お付き合いいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8973y/>

青春とは、恋することと見つけたり。

2011年11月27日19時56分発行